宗教社会学論選　　マックス・ヴェーバー著

　　　　　大塚久雄・生松敬三訳　　　　　みすず書房　1972年

　　　　　　　　　　　2014/12/15 報告　松本倫明

著者紹介

ドイツの社会学者、経済学者

西洋近代の文明を他の文明と区別するものを「合理性」と仮定

官僚制分析—————支配の三類型

①合法的支配

②カリスマ的支配

③伝統的支配

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

『宗教社会学論選』

『職業としての学問』

『職業としての政治』

『(遺稿)経済と社会』

~一　序言~

西洋における合理性

|  |
| --- |
| いったい、どのような諸事情の連鎖が存在したために、他ならぬ西洋という地盤において、またそこにおいてのみ、普遍的な意義と妥当性をもつような発展傾向をとる文化的諸現象が姿を現すことになったのか(P5) |

今日、「普遍妥当的」或は「合理的」と認められる程、発展したものはどの分野においても西洋だけにしか見られない。科学、法学、芸術といった諸分野において、合理性の萌芽は各地域でも見られた。しかしどの地域も西洋における発展段階には達していない。

これは経済にも当てはまる。ヴェーバーは資本主義を「交換の可能性を利用し尽くすことによって利潤の獲得を期待する(P11)」ことにもとづく経済行為とする。

近代西洋において、他の地域では見られなかったような資本主義が生まれた原因は以下の通り。

|  |
| --- |
| 形式的に自由な労働を合理的に管理したこと |
| 住居と経営の場を分けたこと(個人財産と経営財産を法的に分離) |
| 合理的な薄記 |

近代西洋以外の場では、経営は横行や領主による「大規模家政」であった。自由な労働を合理的に組織した経営によって、資本主義が発展した。

著者の目的

資本主義、法、科学。これら西洋の諸文化を合理的にせしめたものは何か。問題となるのは、西洋文化独特の「合理主義」である。この合理主義の成立を解明するには、経済的条件を考慮しなければならない。然し、経済的合理主義もまた、その成立において、合理的な「生活態度」に依存しているのである。

ヴェーバーは本書執筆以前に「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」において、禁欲的プロテスタンティズムの合理的倫理が西洋人の心的態度を条件付けた、と記した。本書では、世界宗教の経済倫理を扱い、宗教と経済、社会との関係を分析し、西洋との比較のための問題点を発見することを目的とする。

~二　世界宗教の経済倫理　序論~

以降、世界宗教とは、儒教、ヒンドゥー教、仏教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教を指す。

宗教的経済倫理

この語が問題とするのは、人々に、宗教に基づいて行為を行なわせる機動力である。宗教は人々の生活様式を規定するものの一つである。そして、個々の宗教において、ある社会層の生活様式が、経済倫理を形成するにあたって主な役割を負った。その社会層は以下の通り。

* 儒教———文書的教養を具えた、宦官
* 古代ヒンドゥー教———聖典に関する教養を具えた人による、世襲的カースト。
* 仏教———現世を棄て、瞑想をこととする托鉢僧
* イスラム教———初期は信仰の戦士の宗教。後に、下層民を指導者とするスーフィー派が出現。
* ユダヤ教———賤民、及び小市民的知識人
* キリスト教———西洋にのみ生まれた市民階級

そして、各宗教において追求される幸福は、宗教の担い手の違いによって多様となる。

宗教倫理——苦難の評価

(a)幸福の神義論[[1]](#footnote-1)(苦難=罪)

苦難に対する態度は、不幸な人の扱い方に現れていた。苦難は神に憎まれていることの徴であり、彼らを宗教的な儀礼に参加させることは神の怒りを招くこととされた。軈て幸福な人間は、自分の幸福に正当性を求めようとする。幸福が富や名誉を表すならば、これを正当化することは、支配者や有力者の利害関心を宗教が正当化することにも繋がる。

(b)苦難の神義論(苦難=聖)

苦難という非日常的状態は「聖なるもの」と評価され、そのような状態は苦行により目覚める。

元来、儀礼は個人の利害を超えたものであった。しかし、個々人の苦難を取り除く制度が徐々に確立され、この制度化によって市民に序言や告知が与えられ、制度の利害関心は平民に寄っていく。更に困窮が繰り返されることによって、「救世主」信仰が誕生する。

ここで信仰の中に合理性が生まれる。ヴェーバーは、救世主信仰は、救い主の神話という相対的に合理的な世界観を前提としていると、指摘する。救世主は次の二つの特徴を備えていた。それは個々人を救済すること、及び彼に縋る者なら誰でも救済するという精確であった。

救世主信仰の発展

救世主や預言者を必要としたのは、種々の生活困窮者であった。予言が齎す救世主信仰は、多くの場合、恵まれない社会層の間で、呪術的な信仰に合理性を補充するものであった。世界観の合理化に伴って、財の倫理的意味が問われ始める。何故なら、最も成功する者は大抵悪しき者であったからだ。そこで、信仰の合理性は更に発達する。それは来世に対する期待であった。

こうして合理的な宗教倫理は、社会的に蔑視された社会層を基盤に展開していく。ここで信仰が合理的世界と結びついたことで、信仰に独自の意味が生まれた。なぜなら信仰が説くものはまさに、合理的世界に対する態度に関わるからである。人間の行為を直接支配するものは利害であるが、世界観は、人間が求める利害の指向に影響する。つまり、世界観は、何から何へ救われることができるのかの基準となったのである。

世界観の発展

世界観や生活様式が理論的、実践的、知的、事実的合理化を果たすことで、宗教は非合理的なものと認識されていく。各社会はこの非合理性の隠し方を基に生まれた。合理的な生活様式は非社会性に規定され、またその非社会性は重要な社会層の利害関係に規定されていたのである。

~三　世界宗教の経済倫理　中間考察~

本性では、インドにおける宗教意識が考察される。インドにおいては、最も徹底した現世否定が生み出されただけでなく、それに対応する技術も最高度に発展した。まず、現世否定は如何なる動機から生まれるのかについて考察する。

現世拒否の意義

現世拒否において、以下の二つの類型の対立がある。

|  |
| --- |
| 行動的禁欲…神の道具として聖意に適うよう行動すること。世俗内において、合理的な形成者として「職業」を通じて、人間形成すること。 |
| 神秘論の瞑想的救済の所有…個々人は神的なものの容器であり、現世における(自分の外部の)行為は非合理的。 |

つまり、両者は「現世内的禁欲」と「現世逃避的瞑想」の対立と言える。

1. 神義論は、弁神論とも言い、神の善性の証明である [↑](#footnote-ref-1)